

## 新出土のガンダーラ浮彫図

——一角仙人——

小谷 伸 男

### はじめに

2006年3月、東京在住のあるコレクターからガンダーラ彫刻のカラー写真一枚が送られてきた。そこに描かれている話の内容を知りたいという問い合わせであった。確かに物語叙事的な浮彫図であるが、私にははじめてみる構図で、これまでに出版されたとの図録にも見当たらないものであった。彫刻の大きさは長さ63 cm、高さ16 cm、奥行き5～6 cmと測定されており、写真からみても、ガンダー彫刻に特有な青灰色の緑泥片岩に浮彫りされた、すぐれた作品の部類であることがわかる [図1-2]。向かって左端が破損しているが、ほかの部分はよく保存されている。下端をくり型の台座（モールドィング）にし、浮彫の上端を曲面状にして上枠に接触させる手法、および横長で高16 cmという形状は、この浮彫がもと建造物の階段蹴込にはめ込まれていたことを示す。破損した左端にはなお数 cmの浮彫図が連続していたとおもわれる。ばあいによっては、さらに別石をつぎたして、物語の続きを浮彫していた可能性もある。

向かって浮彫の左端には鞍をつけたゾウが左に頭を向けて待機し、右端には草庵が見える。草庵の前方に小さな祭火壇が置かれ、内に男が腰かけ、森に住む隠者とその草庵といった情景である。隠者の前に女性が立ち、なにか会話しているらしく見え、その左にも男女一對の図像が三度くりかえされて、先ほどのゾウの姿に連続する。

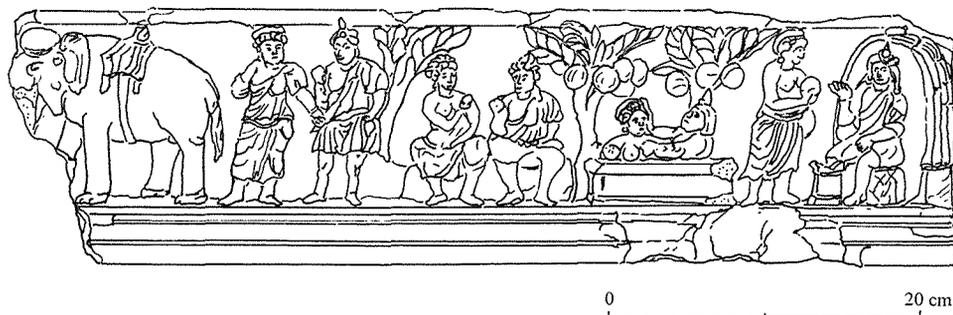


図1 一角仙人図 ガンダーラ出土 高さ16 cm 国外個人蔵（小谷作図）

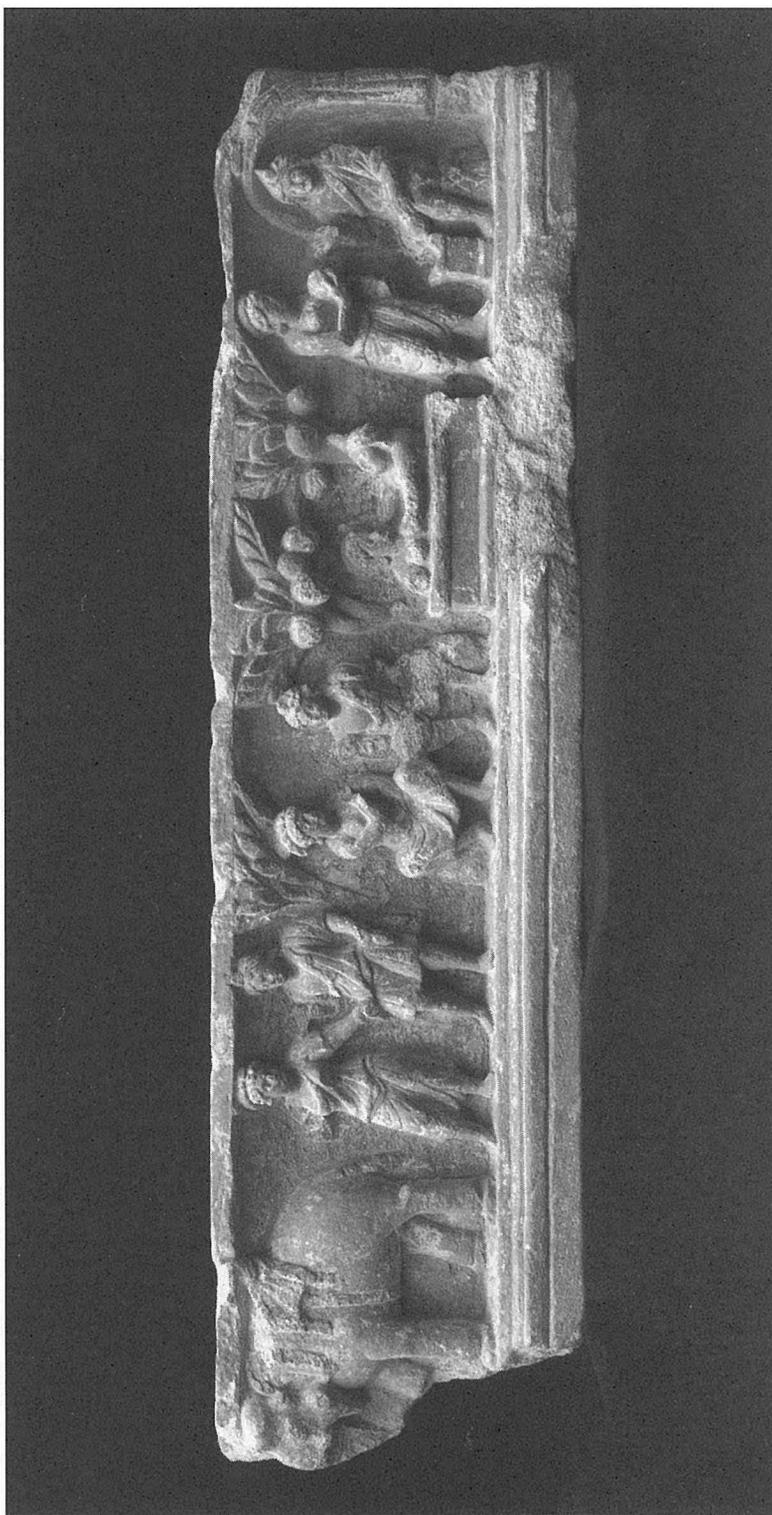


図2 一角仙人図 ガンダラー出土 高さ16cm 国外個人蔵 (写真：栗田功氏の提供)

最初、私が新出の浮彫図を見たとき、そのテーマがヴィシュヴァンタラ太子の物語（本生話）ではないかと思った。現在、大英博物館にはジャマルガリ遺跡出土のヴィシュヴァンタラ本生図が所蔵されている [Zwalf 1996: plate nos. 137, 138, 139]。浮彫板はジャマルガリ遺跡の主塔院に上る階段の蹴込部分にはめ込まれて見つかったものである（1873年）。浮彫の形態、表現手法は今回の浮彫とほとんど同じである。主人公のヴィシュヴァンタラ太子は布施の心が厚く、敵国から派遣された隠密にさえ、乞われるままに国の宝とするゾウを与えてしまう [Zwalf 1996: no. 137]。国王はついに太子を勤当し、太子と妻は男女二人の子供をつれて都から遠く離れた山間に隠棲することになる。山へ向かう途中、乞食に求められると馬車を、ついでウマを与え、最後には子供を背負って山に入る [Zwalf 1996: no. 138]。山中に草庵を作り、草木の実や根をたべ、隠者として生活を送る。そこへまた乞食が現れ、子供を召使にしたいと乞うと、太子は承諾し、子供たちは連れ出されていく。母親は木の実を採りに外出中で、ライオンに道をふさがれ、帰ることができない。 [Zwalf 1996: no. 139]。その本生図にはゾウ、草庵、太子夫妻、男女子供など描かれており、今回の浮彫に対してもまずこの物語を思い浮かべたのである。

その後、機会をみつけて当時、東京に所蔵されていた彫刻の現物を拝見した（その後、国外の個人コレクターに所蔵が移ったと聞く）。はじめ、太子夫妻と子供たちと思っていたのは誤りであることが即座に判明した。4組の男女はみな同一男女の異なる場面のように、予想はもろくも崩れた。もう少し鮮明な写真を送ってもらう約束で、絵解きを宿題にして帰った。まもなく、より鮮明な写真が送られてきた。その中に部分の拡大写真もあり、それらを見ているうちに大切なことに気づいた。右から二番目の場面である。男女が水槽のようなものの中にはいり、向かい合っている。ヴィシュヴァンタラ太子の物語の中で、子供たちは乞食に連れて行かれそうになると、「草庵の後ろに逃げ、……あちこち走りまわったすえ、四方形の蓮池の……水のなかに入り、蓮の葉を頭の上において、水に身をかくした」 [『ジャータカ全集』 10: 213] に相当するシーンかと私が最初に考えたものであった。しかし、その場面の写真を見て、男性の頭の上に一本の角が生えているのに気がついた。そういえば、他の場面の男性にも角がある。これはまぎれもなく一角仙人の物語である。はじめてみる構図である。

## I 「一角仙人」の浮彫図

一角仙人の物語は日本でも古くから知られている。とりわけ有名なのは、『今昔物語』天竺篇、巻五に収録された「一角仙人、女人を背負わされ、山から王城に来る話」である。

そして「一角仙人」図もすでにガンダーラ彫刻の中に検出されていた。それはカルカッタ博物館に所蔵されているガンダーラ彫刻である（図3）。ただ、一角仙人の誕生の経緯のみを描くものである。パーリ語「ジャータカ全集」No. 523話「アランブサー天女の話」によ



図3 一角仙人図 ガンダーラ出土 高さ17.5cm  
カルカッタ博物館（写真：小谷撮影）



図4 一角仙人図 バールフット  
径52cm カルカッタ博物館  
（写真：小谷撮影）

ると、森で苦行中の仙人が小便の際に精液を漏らし、それを雌鹿がなめて妊娠し、男の子を産み落とす。仙人は自分の子であると知って、育てることになる。その子の額には角が生えており、そのため鹿角（リシュヤシュリンガ *r̥ṣyaśṛṅga*）あるいは一角（エカシュリンガ *ekaśṛṅga* = unicorn）と呼ばれたという。話の展開としては、この一角仙人が父の死後、激しい苦行を続け、そのため天上のインドラ神の玉座が揺れ動いた。恐れたインドラ神

は天女アランブサーを派遣して、かれの戒を破ることに成功したという内容で、誘惑の場面はさほど詳しく描かれていない。

なお、カルカッタ博物館蔵ガンダーラ浮彫の原形はすでに古代初期インド美術のバールフット（図4）やサーンチー [Marshall & Foucher 1940: 225; plate 27] の遺品に見ることができる。しかしやはり話の後半（誘惑場面）は表現されず、一角仙人の誕生シーンが中心である。これらの作品の製作は紀元前1～2世紀頃であり、現存の文献資料（テキスト）のどれよりも古く、しかもバールフットの浮彫図には *Isisimgiya jātakam*（イシシングガ=鹿角本生）と題銘が刻まれている [Barua 1934-7: II, 145; plate no. 131]。

パーリ語「ジャータカ全集」にはもう一種の一角仙人の話がある。No. 526「ナリニカー王女の話」

である。ジャータカの編者は「先のアランブサー天女の中ですすでに話したような次第で、父仙人によって一匹の雌鹿が妊娠して子供を生んだ」と記し、一角仙人の誕生の経緯については省略する。むしろ一角仙人の誘惑が話のハイライトとなる。はたしてこの説話で私たちの浮彫図がうまく絵解きできるであろうか。話の展開として、天上のインドラ（サッカ）神が一角仙人の激しい苦行のために、自分の地位が危うくなることを恐れたことは同じであるが、天女を派遣するのではなく、まず雨を降らせなくし、カーシ国（ヴェラーナシー）に旱魃を引き起こす。そうしておいて旱魃に困っているカーシ国の王に対し、旱魃の原因はヒマ

ラヤ山地で苦行するインシンガ（一角仙人）のせいであり、かれが天を恨んで雨を降らせなくしている。かれの苦行を破ることができれば雨が降る。それができるのは王女ナリニカーであると告げる。国王は王女ナリニカーを呼んで話しかけた（斜体字部分が韻文、『ジャータカ全集』8：60-62、片山一良訳より）。

さあ、ナリニカー 行ってまいれ あのバラモンを とりこにせい  
象、馬、車、そしてまた 歩兵を連れて 行け、王女  
そちららきと 美貌によって かれを手中に 収めるだろう

ナリニカーは一角仙人の住む森へと出かけていく。草庵の前にたどり着くと、かの女はボールをつけて遊び、一角仙人の気を引こうとする。

かの女はまりで 戯れ遊ぶ 肢体の隠れた 部分また  
露わな部分を 見せながら

すると一角仙人は草庵から出てきて話しかける。

おいこれ、遠くに 投げてももどり そなたを捨てて 行くことがない  
そのようになる 果実をつけた その樹の名前は 何という

ボールを樹の実と間違ふほどナイーブで、そもそも女性をかつて見たことがない。詳細はジャータカ本文を読んでいただくとして [1907年の英語訳は伏せ字にする！Cowell 1907：V, 102-3]、一角仙人はやすやすとだまされて性行為に及ぶ。仙人の戒は破られ、神通力が消え失せる。二、三度と交わりを重ねて疲れはてると、かれらは庵を出て湖へおりにいき、水浴をする。疲れが取れると、帰ってきて草庵のなかに腰かける。経典（散文テキスト）は、王女はそのうち一角仙人の父仙人が帰ってきて、咎められるのを恐れ、若者が引き止めるのを振り切って急いで立ち去るとする。

浮彫図をみると、右端の第1場面はナリニカー王女と一角仙人の出会い、次の第2場面は水浴の情景。しかし湖水ではなく、方形の枠で囲われた水槽のように表現され、テキストとはくい違ふ。庵で腰かけるのは第3場面である。つぎの第4の場面、私は最初、男性が女性の肩をつかんで引きとめようとしていると見ていたが、鮮明になった写真を見ると、それは逆であり、女性が若者の上衣の端を左手でつかんで、いっしょに森を出ようと誘っているようである。この点もパーリ語経典（散文）の記述とは相違する。経典では一人取り残された一角仙人に対して、父仙人は次のように諭す。あれは森を徘徊する鬼であり、苦行者の威力を滅ぼしてしまうものであるから、くれぐれも気をつけるようにと。そこで若者も気を取り直し、また修行に励んだと物語は結ばれる。

パーリ語経典の「ジャータカ全集」は韻文の詩句とその散文による説明とで構成されている。一般に韻文部分が最初に成立し、古いものとされる。先に引用した韻文「あのバラモンをとりこにせい」と翻訳されていたものが、仙人を王宮にまで連れてくるという意味であるならば、古いテキストでは一角仙人がナリニカー王女に連れられて王宮に来るという筋書きであったかもしれない。『今昔物語』がそうであり、今回の浮彫図もそのようなテキストに

基づいた可能性があるといえる。

## II 「一角仙人」のテキスト

ではもっと浮彫図にぴったりする経典が見つかるであろうか。当時、ガンダーラ地方ではガンダーラ語（中世インド語西北方言）で語られ、カロシュティ文字で記された仏教経典が存在した。初期の漢訳経典（古訳、旧訳）はそれらから翻訳されたものが多くあったと推定される。今のところ、一角仙人物語については、漢訳経典から三種（三系統）を探することができる。そのひとつは仏陀跋陀羅・法顯共訳『摩訶僧祇律』に引用されているものである〔大正大蔵経 22: 232 b～233 a〕。これはパーリ語「ジャータカ全集」No. 523 話に対応するもので、一角仙人の誕生を詳しく語り、天女の阿藍浮（アランプサー）の誘惑については『生経』中に説くがごとしといい、省略している。現存の漢訳『生経』には残念ながら一角仙人の説話は存在しない。もしこのガンダーラ版『生経』が残っておれば、それが私たちの浮彫図のテキストにふさわしいものであったかもしれない。

他の二種の漢訳経典は一角仙人の誕生から誘惑、そして結末までをまんべんなく語っている。まず、義浄訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻 12〔大正大蔵経 24: 161 a～c〕は、一角仙人が雌鹿から生まれ、父仙人に育てられたこと、父が死んだあとも修行を続けたこと、ある日、雨でぬかるんだ道を歩いているうちに滑って転び、天を恨み、呪力によって雨を降らさなくしたこと、それが原因で旱魃を招いたことなどが語られる。そして仙人の誘惑には宮廷女のシャーンター（寂静）がえらばれ、首尾よく任務を果たし、とたんに雨が降り、女は神通力を失った仙人を王宮へ連れ帰ることになった。話は簡略で、誘惑の場面は「共行非法（ともに非法のこを行う）」とだけあり、水浴に触れず、交通手段は草庵に擬装した船を使用し、ゾウが登場することはない。

もうひとつの経典は鳩摩羅什訳『大智度論』巻 17〔大正大蔵経 25: 183 a～c〕である。一角仙人の誕生、ぬかるみに足を滑らせ、天を恨んで雨を降らせなくすることは上述の経典とほとんど変わらない。一角仙人のもとに派遣される女は扇陀（シャーンター）で、この場合は娼婦（姪女）である。誘惑して「可共澡洗（ともに澡洗を行うべし）」といい、浴槽で姪事を遂げるといふうに表現がされている。私たちの浮彫の第 2 場面の水浴の情景を解釈するには適切なテキストに思える。しかし交通手段として車、鹿車があげられ、ゾウは登場せず、必ずしも図像と一致するわけではない。姪事を行う場所が女たちの擬装した草庵の中というのは、木の実がたわわになっている浮彫図の場面をよく説明することになるかもしれない。ガンダーラ版「一角仙人」のテキストに比較的近い系列であるといえる。神通力を失った一角仙人は扇陀（シャーンター）を背負ってヴァラーナシーの王宮までつれて来られるという結末は『今昔物語』と同じであり、その原型と見なされている。

一応、私たちの浮彫図と現存仏典テキストの照合はこれで終わることになるが、一角仙人

の物語は仏教以外の文献にも引用、挿入されている。有名なものでは『マハーバーラタ』第3巻や『ラーマーヤナ』第1巻である（舞台は中インド、アンガ国チャンパーの北）。それらを含めて伝承の歴史や話の原型がどうであったかなど、19世紀の末のH. Lüdersの研究から今日に至るまで、探究の対象とされているが、十分明確になったとはいえない。この点については、さいごにもう一度ふれることにする。

### Ⅲ マトゥラーの「一角仙人」図

一角仙人物語の文献について、ある時期、一角仙人の誕生を詳しく述べるものと、誘惑の場面を詳しく語るものとの二種の伝承が並行していたことを指摘した。ガンダーラ彫刻の一角仙人図に二種存在することもそのことを反映しているのかもしれない。一方、インド本土でもクシャン朝時代のマトゥラー彫刻になると、もっと露骨に誘惑の場面を表現する浮彫作品が出現する。以下にそれを紹介しよう。

第1はゴーヴィンドナガル出土の作品、仏塔をめぐる欄楯（柵）の石柱内側に浮彫されたものである。最上段はブッダのターバン礼拝図、次は雌鹿が仙人の精液を水とともに飲むと場面、その下、一角仙人の誕生、最下段は誘惑、ただし一角仙人が女性から媚薬を入れた菓子を受ける情景でのみで終わる。傍らに立つ背の高い男性は事の成り行きを見守るインドラ神であろうか [Sharma 1995: plate 28; Schlingloff 1987: fig. 2]。

第2はブーテーサル出土の欄楯柱浮彫である。上から順に女たちが船で一角仙人の住処近くまで行く情景、次が女と仙人が並んで岩の上で修行する場面。最下段は性行為の場面であるが、破損が著しい [『世界美術大全集』インド(1): fig. 81; Schlingloff 1987: fig. 3]。

第3はカンカーリ・ティーラー出土で塔門石柱に浮き彫りされたものである。両側面に4場面が浮彫されている。細かな比定は省くが、そのひとつに性行為の場面があり、男性の額に角が一本見えるので、一角仙人が誘惑される場面であることには間違いはない [図5; 『世界美術大全集』インド(1): fig. 291]。

以上はみなマトゥラー地域の作品で、地元産の白い斑点のある赤色砂岩を使用して彫刻されている。最後のカンカーリ・ティーラーの作品は、仏教遺跡からではなく、ジャイナ教寺院に存在したものであった。図像の上方にブラーフミー文字の刻文があ

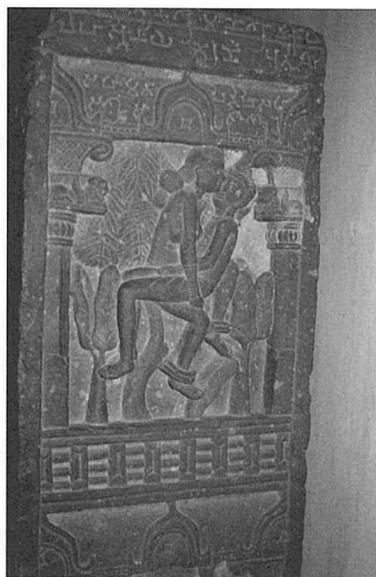


図5 一角仙人図 カンカーリ・ティーラー 幅23.5cm ラクナウ博物館（写真：小谷撮影）

り、次のように記す [Smith 1901: 29, plate xxviii]。

阿羅漢たちに敬礼たてまつる。沙門の女弟子バラハスティニー (Balahastini) によって門柱 (*torana*) が寄進された。両親および義父母とともに。

それがジャイナ教徒の女性の寄進した門柱であることがわかるが、一角仙人の図を描くこともかの女の注文であったかは判断できない。

なぜこのような露骨な場面が寺院の荘厳になされたのであろうか。そのうえ、これらのマトゥラーの欄楯柱の外側には美しい裸体の女性像が彫刻されている。その足もとには邪鬼が踏まえられているので、女性像はみなヤクシー女神で守護神であるが、豊満なバストとヒップはとても魅力的で、インド彫刻の中でも迫力のある彫刻になっている。出家者には刺激が大きすぎるかも知れないとおもう。私はながらくそれがインド風土の持つおおらかさのせいだと感じていたが、今この一角仙人の図像学を学びながら、もっと深い意味があるのではないかと考えはじめた。男性的原理と女性的原理の調和の重要性を私たちに伝えているのではないかと。仏教の厳しい修行はいかにも男性的で、やさしさの女性原理は時には修行の邪魔になる。しかし女性要素を欠いては世界が成りたないことも事実で、どこかでバランスをとることが必要である。一角仙人の説話もこのふたつの原理を際立たせ、その上で調和の大切さを教訓的に、かつ文学性豊かに語り伝えるもののように思う。

また、マトゥラーの美術とガンダーラ美術を比較してみると、ガンダーラ美術にはあのマトゥラーの官能性が明らかに少なくなっている。ガンダーラ美術はギリシア・ローマ美術にモデルを持っているとはいえ、キリスト教美術と同様に次第に禁欲的となり、中世的な宗教美術様式に向かいつつある。もうひとつ考えられる要素は、宗教と商業の栄えた都市マトゥラーという土地柄の特異性、ある種の開放的雰囲気反映しているともいえる。『根本説一切有部毘奈耶藥事』巻10 [大正大蔵経 24: 43 b] を読んでいるときに、マトゥラーに関して仏教徒のあいだにつきのような評判があるのを知った。

ブッダがマトゥラーの城に入ったとき、マトゥラーの星宿女神は次のように考えた。ゴータマ沙門がもしこの城に入れば、私の節日 (祭日) にさしきわりが出るだろう。たくらみをして追い返そうと考え、ブッダの眼前に素っ裸で立った。ブッダは女神に対し、「女人の身体はかりに美しく着飾っても、なお端正とはいえぬ。いわんや裸では！ (女人之体、設嚴華服、猶不端政。何況露形。)」と告げた。天女はその言葉を聞きおえると、慙愧に堪えず、姿をくらました。

ついでブッダはマトゥラーの五難を挙げる。1) 土地の不平、2) 荆棘が多い、3) 瓦石に満ちている、4) 人民の独食 (おいしいものを独り占めする)、5) 女人の多さである。女人が多いとは、マトゥラー彫刻に見るようななまめかしい美人が多かったせいであろうか。このマトゥラーと比較して、ガンダーラという土地柄とガンダーラ仏教の特色が少し判ってきたような気がする。さらに付け加えて言えば、ガンダーラにはシカから誕生する一角仙人の浮彫図が、先に例示したカルカッタ博物館所蔵のほかにも、二、三点発見されている

[栗田功 2003: II-854, 870]。しかし今回の新出浮彫図のような構図は今のところ唯一の存在であり、今後も見つかる可能性は少ないと思う。つまり、あのようなギリシア・ローマ美術の影響を強く残した自由、写実的表現の作品が、その後のガンダーラ彫刻手法の土着化、禁欲的な雰囲気の進行する中で次第に出現しにくくなったと考えられる。それゆえ今回のような一角仙人の彫刻は極めて珍しい、希少価値の作品であると言えよう。

西暦 630 年ころ、ガンダーラを通過してインドに向かった玄奘三蔵は、ガンダーラ国の跋虜沙城（現在のシャハバズガリ村）で、この地方に「一角仙人居所」の伝承があることを記述する。

昔独角仙人所居之处。仙人為姪女誘乱，退失神通。姪女乃駕其肩而還城邑。（そこは昔、独角仙人が居住した処である。仙人は娼婦に誘惑されて神通力を失い、娼婦は仙人の肩に跨って、城内へ帰還した。[『大唐西域記』巻 2]

ガンダーラ仏教の隆盛に伴ってブッダの聖地、聖遺物、そして多くのジャータカ（本生話）の舞台がインド内地からガンダーラへ移転されてきており、今回発見のガンダーラ彫刻「一角仙人」図も本生処のガンダーラ移転とあわせ、貴重な研究資料となる。

## おわりに

この小論文の内容については、金沢大学において主催された第 13 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会（2006 年 10 月 21-22 日）ではじめて口頭発表した。それは年度末の同研究会会報のなかで印刷公表されたが、要旨のみで、発表の際にスライドで提示した写真は含まれていない。翌年 2007 年初めに、国際学会 South Asian Archaeology で顔なじみの Monika Zin さんから彼女の先生である D. Schlingloff 教授の 80 歳祝賀記念論文集に寄稿を依頼されたので、その内容を英文に書き改め、A narrative stone relief from Gandhara: The story of the Unicorn Saint のタイトルで献呈論文とした（2008 年 3 月発送）。当時、論文提出期限が 2008 年 3 月末、記念論文集の刊行が 2008 年末と予定されていた。しかし今のところ種々の事情で遅れているらしく、出版のスケジュールが届いておらず、正確な刊行時期は不明である。そうしたところに『西南アジア研究』編集部から寄稿の誘いがあったので、日本語でのこの小論を発表させていただくことにした。

本文の内容は英文で書いたものとほとんど大差はないが、ドイツの Monika Zin さんのもとに英文原稿を送付した後、Schlingloff 教授から献呈論文に対する礼状と読後感を記した私信をいただいた（2008 年 9 月）。そのコメントのなかで、一番印象的なのは、Schlingloff 教授が新出ガンダーラ浮彫図の第 4 場面（ゾウの手前の男女像）に注目したことである。「最初、私は男性が女性の肩をつかんで引きとめようとしていると見ていたが、鮮明になった写真を見ると、それは逆であり、女性が若者の上衣の端を左手でつかんで、いっしょに森を出ようと誘っているようである」と私が判読した場面である。その解釈に対して教授は予

想以上の関心を示した。私自身も本文のなかで述べたように、パーリ語の韻文ジャータカ (*verse jātaka*) とそれを敷衍した説明散文 (*prose jātaka*) との間に内容の相違があることに気づいた。散文ジャータカでは、王女ナリニカーが一角仙人の父親が帰ってきて、自分の正体を暴露するのを恐れ、若者が引き留めるのを振り切って帰ってしまった。ひとり取り残された若者は、父親仙人から「あれは森を徘徊し、修行を邪魔する鬼である」と諭され、気を取り直してまた修行に励んだと物語を結んでおり、一角仙人がナリニカーによって王宮にまで連れてこられる筋書きではなかった。その点、韻文で国王がナリニカーに「あのバラモンをとりこにせい (bring the brahmin to me)」と命じた表現とは異なる。つまり新出のガンダーラ一角仙人図はパーリ語「ジャータカ全集」に含まれる古層というべき韻文のほうによく合致するのである。Schlingloff 教授は手紙のなかで次のように表現された。All earlier researches on the unicorn story are superseded by this fragment. このガンダーラ浮彫図に対する最大の賛辞であり、私もうれしくおもう。

私がこの小論 (英文) を Schlingloff 教授に献呈したいと考えたのは、教授の研究業績に接し、以前から教授が一角仙人の説話に関心を持っていると感じていたからである。Schlingloff 教授は 1987 年に *Studies in the Ajanta paintings* を出版し、その第 16 章を「インド説話一角仙人の起源と伝播 (The unicorn, origins and migrations of an Indian legend)」にあてた。主題はアジャンタ壁画のひとつを一角仙人説話に同定するところみであったが、その中で一角仙人説話の起源について詳細に考察し、最古の形は古代メソポタミア文明の「エンキドゥとギルガメシュの物語」にまでさかのぼるという考えを示した。その物語のなかには、森のなかの野性人間であるエンキドゥが登場し、ウルクの国王ギルガメシュは娼婦に命じてかれを懐柔し、ウルクの都へ連れてこさせるという話がある。私は 1977-80 年にイラクのハムリ・ダム水没遺跡の発掘に従事し、古代メソポタミア文明の奥深さを感じていたので、その考えには共鳴したい。野性と文明という人間の文明史上はじめて遭遇した問題が、そのような説話を生み出し、語り継がれたのであろう。したがって起源も古く、伝播の範囲も広い。

しかし Schlingloff 教授は 2000 年に、あらたに 3 巻からなる *Ajanta* を出版し、先にアジャンタ壁画 (第 XVI 窟) のひとつを「一角仙人」説話に比定した前説を撤回した。それは「大猿王本生 *mahākapi-jātaka*」に連続する部分であったと訂正した。[Schlingloff 2000: I, 142]。その誤解の原因は壁画の損傷と不鮮明さにあり、またそれを最初に書き起こし図にした先行研究者が、男性を女性にみまちがえて描いていたからであったという。したがって、現在ではアジャンタ壁画に「一角仙人説話」図は存在しないことになった。最後に Schlingloff 教授の長寿とご健康を祈念してこの日本文の稿を閉じたい。

## 参考文献

- アランプサー天女物語 (Jātaka no. 523, 片山一良訳) 『ジャータカ全集』 8, 春秋社 1982, 30-37.
- ナリニカー王女物語 (Jātaka no. 526, 片山一良訳) 『ジャータカ全集』 8, 春秋社 1982, 59-68.  
『マハーバーラタ』 3 リシャシュリンガ (鹿角仙人) 物語 上村勝彦訳, ちくま学芸文庫 2002, 308-319.
- 『マハーヴァストゥ』 一角仙人 岩本裕訳 『初期経典』 読売新聞社 1974, 337-370.
- 『ラーマヤナ』 リシュヤ・シュリンガ仙人, 岩本裕訳, 平凡社 (東洋文庫) 1980, 38-43.
- 『大智度論』 卷 17 (大正大蔵経 25, 183 a-c).
- 『経律異相』 卷 39 (大正大蔵経 53, 209 c-210 a).
- 『法苑珠林』 卷 71 (大正大蔵経 53, 827 c-828 b).
- 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 卷 12 (大正大蔵経 24, 161 a-c).
- 『摩訶僧祇律』 卷 1 (大正大蔵経 22, 232 b-233 a).
- 『今昔物語集』 天竺・震旦部 岩波文庫 2001, 195-201.
- Avadānakalpalatā* No. 65 *Ekaśṛṅgāvadānam* (II, 411-420).
- 岩本裕 (1978) 『仏教説話の源流と展開』 開明書店.
- 岩本裕 (1984) 『初期仏典』 (仏教聖典選 第一巻) 読売新聞社.
- 小谷仲男 (2006) 新出土のガンダーラ浮彫図: 一角仙人 『第 13 回ヘレニズム〜イスラーム考古学研究』 金沢大学文学部, 21-23.
- 上村勝彦 (2003) 『インド神話』 ちくま学芸文庫 (初出 1981 年).
- 栗田功 (2003) 『ガンダーラ美術』 (改訂増補版) II 二玄社.
- 定方晟 (1992) 『インド性愛文化論』 春秋社.
- 『世界美術大全集』 東洋編 13 インド (1) 小学館 1999 年.
- 杉本卓洲 (1983) *Yakṣa* と菩薩 —— *Mathurā* の仏教をめぐって —— 『金沢大学文学部論集 行動科学篇』 第 3 号, 79-108.
- 杉本卓洲 (1990) 愛欲 (*kāma*) と苦行 (*Tapas*) —— 仏陀の中道説をめぐって —— 『金沢大学文学部論集 行動科学篇』 第 10 号, 59-86.
- 杉本卓洲 (1993) 『菩薩 —— ジャータカからの探求 ——』 平楽寺書店.
- 杉本卓洲 (2000) マトゥラーのジャータカ図 『金沢大学文学部論集 (行動科学・哲学篇)』 第 20 号, 39-74.
- 杉本卓洲 (2000) マトゥラーの一角仙人本生図考 『高木神元博士古希記念論集・仏教文化の諸相』 山喜房仏書林, 79-97.
- 杉本卓洲 (2002) ガンダーラのジャータカ図 (2) 『金城大学紀要』 2, 59-75.
- A. フーシェ著, 杉本卓洲監修・門脇輝夫訳 (1993) 『仏陀の前生』 東方出版.
- 田中於菟彌 (1991) 『インド・色好みの構造』 春秋社.

- 田辺勝美 (1985) 一角仙人と古代西アジア文化『ユーラシア』新第2号, 23-45.
- 中村元監修 (1981-1991) 『ジャータカ全集』全10巻 春秋社.
- 根岸宏典 (1992) 彫刻に見る一角仙人説話の展開, 印度学宗教学会『論集』第19号, 19-36.
- 干瀾龍祥 (1978) 『本生経類の思想史的研究』(付篇本生経類照合全表共) 山喜房仏書林.
- 干瀾龍祥 (1961) 『ジャータカ概観』春秋社.
- 平等通昭 (1983) 『印度仏教文学の研究』第三巻 (梵文大事譬喩譚に於ける本生話の研究) 印度文学研究所.
- 前田雅之「一角仙人物語の構造と展開」1-4『文芸と批評』5-6, 8, 9 (1981年), 6-7 (1988年), 5, 6, 『東京女学館短期大学紀要』12 (1990年), 16 (1994年).
- Bachhofel, L. (1973) *Early Indian Sculpture* (rep ed). New Delhi.
- Barua, B. M. (1934-7) *Barhut*. 3 vols. Calcutta. (1979 rep ed). Delhi.
- Chavannes, Ed. (1910-11, 1934) *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois*, Tomes I-IV, Paris.
- Cowell, E. B. (ed) (1895-1907) *The Jātaka or stories of the Buddha's former births*. 6 vols. (1973-78 rep ed). New Delhi.
- Cunningham, A. (1875) *Archaeological Survey of India*. Vol. V.
- Fischer, K. (1980) Hidden symbolism in stūpa-railing reliefs: coincidentia oppositorum of Māra and Kāma. In A. Libera Dallapiccola (ed), *The stūpa: its religious, historical and architectural significance*. F. Steiner, 90-99.
- Fischer, K. (1983) Ṛṣyaśṛṅga in the narrative art of Jaina Stūpas at Kaṅkālī-Ṭilā. *Indologica Taurinensia* vol. XI, 227-240.
- Foucher, A. (1919) Les représentations de Jātaka dans l'art bouddhique. *Memoires concernant l'Asie Orientale, Inde, Asie centrale, Extreme-Orient*, Tome III, Paris, 1-52.
- Foucher, A. (1947) Deux jātaka sur ivoire, provenant des fouilles de Joseph et Ria Hackin au Begram de Kapiçi (Afghanistan), 1939. *India Antiqua; A volume of Orinetal Studies*, Leiden, 124-131, pl. IX.
- Foucher, A. (1955) *Les vies antérieures du Bouddha d'après les texts et les monuments de l'Inde*, Paris.
- Joshi, N. P. (1966) *Mathurā Sculptures*. Mathurā.
- Lamotte, L. (1949) *Le traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*, Tome I & II, Louvain.
- Lüders, H. (1940) Die Sage von Ṛṣyaśṛṅga; Zur Sage von Ṛṣyaśṛṅga. In *Philologica Indica*. Göttingen, 1-43 (1897); 47-73 (1901).
- Majumdar, N. G. (1937) *A guide to the sculptures in the Indian Museum*, part II. Delhi.
- Marshall, J. and Foucher, A. (1940) *The monuments of Sāncī*. 3 vols. (1982 rep ed). New Delhi
- Schlingloff, D. (1987) *Studies in the Ajanta Paintings*, Delhi.

- Schlingloff, D. (2000) *Ajanta*. 3 Bande, Wiesbaden.
- Smith, V. S. (1901) *Jain Stūpa and other antiquities of Mathurā* (1969 rep ed). Varanasi.
- Takakusu, J. (1898) The story of the R̥ṣi Ekaśṛṅga (独角仙人) *The Hansei Zasshi*, XIII-1, 10-18.
- Vogel, J. Ph. (1930) *La sculpture de Mathurā*. Paris.
- Zwalf, W. (1996) *A Catalogue of the Gandhāra Sculpture in the British Museum*. 2 vols. British Museum Press, London.

(京都女子大学文学部)